

河野房男教授のこと

——『史学論叢』第十一号の出版によせて——

賀 川 光 夫

別府大学文学部に史学科が新設された昭和三十八年四月、第一期として八名の学生が入学した。その新入生の歓迎旅行は大野川流域であった。大野町と朝地町に二泊したと記憶しているが、夕食後近世文書の基礎的講読会は新入生にとっては大へんな勉強会であった。河野房男教授は、その厳格な指導者であった。この小旅行は、長文の庚申碑文を見学したり、石幢など石造美術を勉強したりして楽しい思いでを残した。特に、大恩寺稻荷洞穴の発見は後に日本考古学協会洞穴遺跡特別委員会の学術調査によって大きな成果をあげることになった。

河野教授は、史学科発足当初から日本古代史を主に担当し、厳しく史料を選択し、学生の指導にあたった。学生の一部からは「頑固親父」といわれ、ピリピリとして講義を聞いたという噂もあった。しかしその学生達とのコンパでは相好をくずして大いに呑み、酔うと黒田節を歌い踊った。

さて河野房男教授は、昭和十一年九州大学法文学部を卒業、その卒業論文は「御三条天皇の御讓位につきて」であった。この論文を通じて考察した平安後期政治と社会、とりわけ複雑な人間関係とそこに生きる人間の諸相が生涯の研究テーマとなった。一貫して平安後期に集中した研究態度は、内容を深め、新事実を掘り起こし、史的内容も高めることになる。門外漢にちかい私などが教授の論文を読むときは、系譜や関係史料において読むほどに難解な問題も多くあった。しかしひとたびその内容に立ち入るとだんだんと味がでて夢中になる。けし

て誇張がないが問題に深みがあり、一つ一つ納得することができる。ここで問題の深みを感じさせるのは、一つ一つの史料がよく吟味され、それを丁寧に積み上げてゆく過程が智恵の輪のようで、この点が興味深いのである。史学を専攻し、その理論体系を学ぶためには、教授のこうした厳しい史料吟味と、理論体系を学ぶ必要がある。史料の取りあつかい、理論的考証の明快さは、長い間の研究の自信であって、この点に何らの妥協もない。

河野教授は、このたび専任教授を退き、その記念として出版された大著に、生涯の成果が発揮されている。その一つ『平安末期政治史研究』は、且ての卒業論文からはじめられて数々の新分野をきり開いた平安末期政治の諸問題について大成された秀作である。また『右府藤原宗忠と日野法界寺』は、末法を迎えて仏陀に帰依し、極楽往生を誓願する平安貴族の一面を繊細な観察をもって書き綴ったものである。政治構造の厳しさと、その裏面にみる人間の薄倅な生涯を平安末期に焦点して著述されている。けれど平安後期の歴史において完璧をこの分野でみる思いがした。

河野房男教授は、今年七十六才になられ、間もなく喜寿を迎えることになるが教授は、まだ若々しさを失っていない。先頃、自宅の庭で柿ノ木より落下転倒し、背椎の一部を骨折し、入院された。このときはるか年下の私に文句をいわれ、子供のようにしおれておられたが、骨折は数ヶ月で全治したのである。この若さがある限り、われわれを指導し、学生達を教授することは可能である。これからも、健康に注意され、知識の限りをお教え願いたいと考えている。『史学論叢』第十一号を出版するにあたり、教授の御指導を感謝し、最大の敬意を表するものである。